



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集

ものづくり工房の挑戦

vol. **26** | 季刊 **冬**
2013



【特集】

ものづくり工房の挑戦

今、近代建築の復原、保存への意識が高まっている。そこには、かけがえのない記憶を残したいと願う気持ちがある。建築的な価値を次世代に引き継いでいきたいという意志がある。ライブミュージアムのものづくり工房は、やきものの街で培ったものづくりの伝統や技術を活かし、数々の文化財の復原や再生に協力している。その日々の活動が、ものづくりを受け継ぎ、活かして、新しいかたちで未来につながっていく。



INAXライブミュージアムは、東日本大震災の復興を支援しています。

01 〔特集〕ものづくり工房の挑戦

02 新しい建築をつくり出すために
—近代建築保存と、ものづくり工房のタイル復原
飯田喜四郎さん

04 ものづくり工房のしごと

LIVE REPORT

開催報告

06 陶と灯の日
企画展関連ワークショップ
漆喰塗りの卓上かまどをつくろう

07 建造100周年「常石車」曳き回しで窯のある広場へ
光るどろだんご全国大会 2012

LIVE SCHEDULE

これからの催し

08 日本の白い壁—石灰がつくり出す多様な世界

09 大竹伸朗『焼憶展』

CONTENTS

INAXライブミュージアム
NEWS LETTER

vol.26 季刊 冬
2013

表紙写真

企画展「日本の白い壁」の会場で。地域の伝統産業についてレポートを書くため、ヒントを求めて初来館されたお2人。土とともに歩んだ常滑とINAX創業の歴史に触れ、改めて地元の良さを発見したそうです。

(2012.12.2)

撮影：加藤弘一

常滑から*

25

「常石車」100年



久しぶりに鳥肌が立つほどの感動を覚えた—某スタッフの言葉である。
11月3日、INAXライブミュージアムに今年100歳を迎えた「常石車」がやってきました。ライブミュージアムがある常滑市奥条区の山車で、毎年春の祭礼には他地区の5つの山車とともに地区内を曳き回し、この海辺の街にわたかな香をよぶ。
今年には建造100年を記念して特別な曳き回しが行われた。赤い装いに身を包んだ血気盛んな若衆に曳かれて地区内を巡り、夕刻ミュージアムへ。スタッフを震えるほど感動させたのは、その雄大な姿と「世界のタイル博物館」に向かって上げられた「木遣り」という唄。陽が落ちて提灯の灯りに彩られた「常石車」を背に、梶方衆が声をそろえて唄う声は夜の澄んだ空気に、届かせた人々の心を震わせた。そもそも「木遣り」とは、大きく重い石や材木を大勢で運ぶ作業の際、全員力を合わせるため、号令のような役割をはたしたものだそう。
「木遣り」にあやかり、皆で声を掛け合い、心をひとつにして、このミュージアムの活動をより充実したものにしていきたい。

尾之内明美（広報担当）

※INAX創業の地・常滑の人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。

昔の建築は見ていて楽しいですね。戦後、シンプルな形が美しいと強く言う人たちがいました。建物に装飾は必要なく、目的に忠実につくれば、いい建築ができて、しかも美しいと。ちょうど私が大学生のころ盛んにそう教えられました。しかし私は、建築は実用的という視点のほかに楽しいという要素があつて初めて芸術になり、街の顔になると考えています。

殺風景な日本の街並み

日本は戦後、きわめてつまらない建物をつくってきました。お金がなかったということもあります。当時は、デザインなんて問題じゃない、人間が入って仕事ができればいいというものでした。その形が、高度経済成長を経て豊かになつてもそのまま残った。ヨーロッパと違い、日本の街並みがつまらないのは、蓄積のある建物が少ないからです。新しい建物ばかりでは、街は殺風景になります。

明治期、日本にヨーロッパの建築を導入したのはジョサイア・コンドルというイギリス人でした。戦後、やはり建築家である彼の親族を呼

少しでもサンプルになり、拠点になるような良い建物は残していくことが大切です。そして、学んでいくでなければ、次に新しいものをつくるときに全く手掛かりがないということになつてしまいます。東京駅の復原にみるように、再び歴史的な建物の保存が目されてきたのは、みんなが、現代建築がつまらない、何とかしなくてはという思いを抱いているからでしょう。

建物ができた時代を再現する

過去の建物に学び、新しいものを生み出すためには、その建物の空間に身を置いて、何を感じるかが大切です。施主や設計者、職人たちを含めて、建てた人たちの思い、建物ができた時代をも再現するのが復原ですから、中途半端にはできません。

たとえば、「ものづくり工房」にもお手伝いいただいた旧本多忠次邸(岡崎市)。当主の本多忠次氏がひじょうに熱心に勉強し、基本計画も自分で指示してつくった邸宅です。内装まで整えて建物そのものを見せたいという考えでしたから、なるべく昔のまま残すという方針でした。

タイルについても、移築に際しては、外してそのまま持ってきていますが、どうしても欠ける部分があるそこで、「ものづくり工房」にお願

新しい建築をつくりだすために

近代建築保存と、ものづくり工房のタイル復原



飯田喜四郎

愛知工業大学客員教授
名古屋大学名誉教授

ものづくり工房のタイル復原



旧本多忠次邸 (岡崎市・東公園内)

旧岡崎藩主本多家(本多忠勝系)の末裔にあたる本多忠次氏(1896-1999)が、1932(昭和7)年、東京・世田谷に建てた住宅と壁泉(壁につけたオブジェから水が流れ出るようにつくられたもの)を移築し復原。ものづくり工房では、バルコニーのタイル、トイレや浴室を装飾しているモザイクタイルなどを復原した。「時間とともに変化した既存のタイルと調和する表情を出すことに留意しました。」



芝川又右衛門邸 (博物館明治村)

1911(明治44)年、大阪の商人・芝川又右衛門の別荘として西宮市甲東園に建てられた。設計は武田五一。ものづくり工房は、暖炉周りやトイレ、ペランダのタイル、煙突などを復原。暖炉周りのタイルは、注文数20枚に対し数百枚の試作を重ね、一枚一枚手づくりした自信作だ。「復原の意味と面白さを教えていただいた、やりがいのある仕事でした。」



写真: 博物館明治村提供

んで、東京で設計してもらったとき、その人は「何の拘束もなく自由に設計できる、こんないいことはない」と言っています。それくらい、ヨーロッパでは既存の建物からの拘束力があるわけです。その手順を踏まない限り新しい建物はできない。手順を踏むということは、古い建物が持っているものを新しい建物に活かしていくということですね。

緩やかなグラデーションで変わっていく街

パリの街並みは調和していると思われるでしょう。あれらは、17世紀から20世紀の初めまで、3世紀以上かけてつくられた建物群です。過去の建物をまねたものではありません。その空間を体感し、自分の中で考え、昇華された新しい形の建物が生まれました。それが隣の建物とかなり違うデザインであっても、それでいいのだらうと思います。そうしてできたものは、全くかけ離れたものにはならない。弦は切れておらず、ある程度つながりができますから、街は緩やかなグラデーションで変わっていくことになる。日本はそれをやっていないから、都市景観がすっかり壊されてしまった。

は簡単なことではありませんし、補修用ですから必要枚数はごくわずか。お願いするのも申し訳ないのですが、技術も経験も持ちて信頼している「ものづくり工房」にしかお願いできません。とても熱心にやっていたでいて、いつも助かっています。

タイルやテラコッタの可能性

これからは、もう少し、建築を我々の感性に訴える形にしていかなければならない。そのためには、やはり建築に合う立体的な素材を使って、表現というものを再評価していかなければならぬ。タイルやテラコッタは、今後たくさん使われる可能性があると思います。

新しい建築をつくりだしていくために、建物の復原、保存は大切な事業で、それは、「ものづくり工房」のようなところがなければできないと思っ

(談 2012年11月9日収録)



東京駅丸の内駅舎

(東京都・国指定重要文化財)

1914(大正3)年、辰野金吾の設計で建てられ、戦災により南北のドームと屋根・内装を焼失。戦後、3階建ての駅舎を2階建てに修復したが、2012(平成24)年10月、創建時の外観に復原された。ものづくり工房は社内の他部署やアカイタイルと協力して、3階部分の化粧煉瓦(通称:赤煉瓦)の製造に挑戦、約50万枚が採用された。2003年から試作を重ね、2010年の本生産が開始されるまで7年間試行錯誤を繰り返し、15,000枚を超える試作を重ねた一大プロジェクトだった。「既存する1、2階部分と調和するように、当時の煉瓦の色のばらつきを、現在の技術で復原するのに苦労しました。」

飯田喜四郎 IIDA kishirou

1924年生まれ。東京大学建築学科卒業。1953~56年フランス留学、フランス文部省文化財保護事業部主任建築家事務所などで学び、帰国後、宮内庁管理部勤務を経て、1963年名古屋大学工学部助教授、1966年名古屋大学教授。専攻はフランス建築史(中世ゴシック建築)、建築保存修復学。2003年「我が国における西洋建築史学の確立と建築文化財保存の実践に対する貢献」により日本建築学会大賞受賞。新宿御苑御休所、原爆ドームなど多くの保存修復事業の委員長を歴任。博物館明治村4代目館長を務めた(現顧問)。

ものづくり工房のしごと

ライブミュージアムは、「ものをつくるミュージアム」。
光るどろだんご、モザイクタイル：訪れる人が楽しむだけでなく
ものづくり工房でも、日々、ものづくりに挑戦しています。



【企画展】

水と風と光のタイル

F.L.ライトがつくった土のデザイン

独特の形状と色合いを持つライトの装飾タイル空間を再現するために、ものづくり工房では、残された現物のタイルから寸法を採り石膏型をつくって、当時と同じ知多半島の土、「内海粘土」を掘り出して用い、一つひとつ手づくりした。「デザインが繊細で型に粘土を詰める作業は特にむずかしかったし、量も多く大変だった。自分たちは1点1点つくることに集中しているので、展示ができあがった時はうれしかったですね。」



スクラッチ模様をつけるために道具もつくった。

企画展を支える

毎回、多彩なテーマで取り組むライブミュージアムの企画展。そこにはいつも、テーマを体感できる「空間」がある。体験・体感型ミュージアムとして、見て、触れて五感で感じてもらうことを何より大切にしている。

この空間展示を支えているのが、ものづくり工房。残された図面を追い、古い文献や写真を探る、実物を目に焼き付けて釉薬を想像する。試作を繰り返す。「図面があっても作り方まで残っていない。残されたもの、から材料や作り方を推測して、つくってみる。古いものを探っていくと当時の職人は何にこだわったのか、目に見えないところまで知りたくなります」。こうして一つひとつ、スタッフがつくりあげたものが、展示会場で施工され空間となる。ものづくり工房とタッグを組んだ企画展。これがライブミュージアムならではの強みだ。

修復に力を発揮する

大正末期から昭和初期にかけて建物を飾ったやきもの「テラコッタ」。伊奈製陶当時から収集されたテラコッタの数々を受け継ぐライブミュージアムは、2012年4月、屋内外にテラコッタを展示した「建築陶器のはじまり館」をオープン。開館にあたって、ものづくり工房は、部分的に破損し



企画展で再現された帝国ホテル旧日本館の壁面や柱。▶



【企画展】

ゆらぎ、モザイク考

粒子の日本美

細かく砕いたタイル片で模様を描かれた、東京国立博物館本館ラウンジの漆喰壁を再現。

修復部分（上）



横浜松坂屋本館

【常設展】

テラコッタパーク

テラコッタパークでひときわ目を引く横浜松坂屋本館(1934年)のテラコッタ。残っていたオリジナルの部分3次元スキャナで測定し、形状をデータ化、型に起こすところから修復は始まった。白の色調だけでなく、艶のないマットな肌合いも追求した。



松坂屋のマークも復原

やきものの未来をつくる

ものづくり工房では、日々、タイルなどやきものに関する調査と研究、試作を進めている。「この深い青はどんな調合の釉薬を使っているんだろう」「なぜ、こんなふうになるのか」。現代のやきものでは見られない味わいや表情を持つものと出会うと、好奇心をかき立てられて分析したり、釉薬調合を試したり。時間があれば試作や復原に挑むことも。過去のものづくりから発見し、教えられることは尽きない。そうして蓄積された知識や技能が、企画展や復原だけでなく、現代の新しい技術にも応用されていく。

ここにも生かされた、ものづくり工房の技

アーティスト・イン・レジデンス

設計者やアーティストなど、国内外のクリエイターとのコラボレーションで、タイルや陶板、便器など住生活空間を彩るやきもの可能性をともに探っている。たとえば、瀬戸内海、直島での「直島銭湯」プロジェクトでは、美術家、大竹伸明さんに協力。初めてタイル壁画に挑戦する大竹さんとともに、めざす表現をやきもで実現するためにコミュニケーションを重ねた。アーティストとのコラボレーションから多くの刺激を受けている。



建築陶器のはじまり館

建築陶器のはじまり館のファサードには、ものづくり工房で制作したオリジナルのテラコッタが使われている。テラコッタをつくるのがほとんどない今、貴重な機会とスタッフ全員で取り組んだ。意外に時間がかかった「力のかけ具合がむずかしい」昔のテラコッタはすごい。また一つやってみてわかったものづくりの奥深さ。軒先を飾るメイド・インものづくり工房のテラコッタに注目してほしい。

